

拝啓

明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしく願い申し上げます。

いつも「エンカウンター」をお読み頂き、ありがとうございます。

「エンカウンター」は、平成 14 年 5 月 31 日が創刊号であります。が、「エンカウンター」という題名をつける数ヶ月前から何人かの方にお送りしていました。その意味で本当の創刊号は、平成 14 年 1 月 27 日号で、そのきっかけは、パソコンを個人用に買って、試し打ちに、アメリカに帰られた宣教師のルツ・エルマー先生が残された小さいパンフレットの文章を引用、印刷し、佐藤れんさんにお送りすることでありました。

その事実上の創刊号の冒頭に引用した文と同じ内容の文章「孤独な生涯」が、「希望と信頼に生きる ウィリアム・バークレーの一日一章」の 12 月 25 日のところに出ていましたので、改めて引用させていただきます。(翻訳は異なります。)

「一つの孤独な生涯」

世に知られぬ小さな村に、ユダヤ人を両親として生まれた一人の男がいた。母親は百姓女であった。彼は別の、これまた世に知られぬ小さな村で育っていた。彼は 30 になるまで大工の小屋で働いていた。それから旅まわりの説教師となって 3 年を過ごした。

一冊の本も書かず、きまった仕事場もなく、自分の家もなかった。家族をもったことはなく、大学にいったこともなかった。大きな町に足を踏み入れたことがなく、自分の生まれた村から 200 マイル以上外に出たことはなかった。偉大な人物に普通はつきものの眼をみはらせるようなことはなに一つやらなかった。人に見せる紹介状なぞなかったから、自分を見てもらうことが唯一つのたよりであった。

はだか一貫、もって生まれた力以外に、この世とのかかわりをもつものは何もなく。ほどなく世間は彼に敵対しはじめた。友人たちはみな逃げ去った。その一人は彼を裏切った。彼は敵の手に渡され、まねごとの裁判に引きずり出された。

彼は十字架に釘づけされ、二人の盗賊の間に立たされた。彼が死の寸前にあるとき、処刑者たちは彼が地上で持っていた唯一の財産、すなわち彼の上着を、くじで引いていた。彼が死ぬと、その死体はおろされて、借物の墓に横たえられた。ある友人のせめてものはなむけであった。

長い 19 の世紀が過ぎ去っていった。今日、彼は人類の中心であり、前進する隊列の先頭に立っている。かつて進軍したすべての軍隊、かつて建設されたすべての海

軍、かつて開催されたすべての議会、かつて統治したすべての王たち これらをこ
とごとく合わせて一つにしても、人類の生活に与えた影響力において、あの孤独な生
涯にとうてい及びもつかなかった、と決めて決して誤りではないであろう。

「エンカウンター」を、最近からお送りしている方もございますので、創刊
の理由を説明している創刊号を、添付させていただきます。

寒さが厳しくなってきました。御身体御自愛のほど祈り申し上げます。

敬具

平成 17 年 1 月

山口周三
エンカウターの読者各位